目　次

【最優秀賞】

☆小学校の部

・ほんをよむまち
鵜沼第二小学校　一年　足立　琴葉　1

・大じな「新川しま大はし」
川島小学校　二年　北尾　樹　1

・みんなでしぜんを大切にしよう
那加第一小学校　三年　田中　鴻　1

・地域の「村国座」について
各務小学校　四年　黒井　颯　2

・じいちゃんの作る米
那加第三小学校　五年　山田　楓羽人　2

・自転車に乗るぼくとあなたにできること
川島小学校　六年　渡邉　創太　3

☆中学校の部

・私の好きな文化財
鵜沼中学校　一年　後藤　愛結　3

・マイ　アップデート
那加中学校　二年　鈴木　実優　4

ほんをよむまち

鵜沼第二小学校　一年　**足立　琴葉**

わたしは、ほんをよむことがだいすきです。こうえんのとなりにあるちゅうおうとしょかんへほんをかりにいきます。ほんをよむと、たくさんのことがしれます。あたらしいことがいっぱいみつかってうれしいきもちになります。

つぎのほんは、どんなおはなしかなとあたまのなかでかんがえるとすごくたのしいです。

いちねんせいになって、がっこうのとしょしつでほんをかりられるようになりました。おともだちに

「このほんおもしろかったよ。」

というと、おともだちが

「そのほんかりるね。」

といってくれます。つぎのひは、そのほんについておともだちとおはなしできて、もっとなかよくなりました。

わたしはこれからもたくさんほんをよんで、いろんなことをしっていきたいです。ほんをよむのは、たのしいきもちになるから、みんなもほんをよんでくれるとうれしいです。

大じな「新川しま大はし」

川島小学校　二年　**北尾　樹**

ぼくのいえの近くには、「川しま大はし」がかかっています。ぼくが三さいのときに、はしのたもとがずれていることがわかり、そこからこうじがはじまりました。まい日、きょ大なクレーン車や今まで見たことのないじゅうきをていぼうからながめるのがたのしみでした。とてもはく力があるからです。

しばらくすると、かりばしができて、ぼくは、そのかりばしをわたって学校へかようことができています。でも、かぞくやまわりの大人たちは、とおまわりをしなければならないのでふべんだと言っていることを聞きました。川しまは、大きな川にかこまれているので、学校へ行く人、おしごとに行く人、びょういんやおかいものに行く人など、みんなの生かつをささえている大じなはしが「川しま大はし」です。みんなが、

「早くなおるといいね。」

とはしのかんせいをねがってきました。

三月二十二日に新川しま大はし見学かいがあるとかいらんばんでまわってきました。そのお知らせを見て、おかあさんが、

「見学かい、行ってみる？」

と言ったのでぼくはすぐに、

「ぜったいに行きたい。」

とこたえました。そこで、おばあちゃんもさそって、かぞくみんなでさんかすることにしました。

そして、とう日。じっさいにはしをわたっているとき

「クレーン車、すごく大きいね。どれぐらいの高さなんだろう。」

とぼくはおかあさんに言いました。まい日さぎょうをしている人は、こんなに高いところでぼくたちのためにがんばってくれているんだと思って、ありがとうの気もちでいっぱいになりました。新川しま大はしはもうすぐかんせいすると学どうの先生に聞きました。これから気おんも高くなるし、雨もたくさんふるきせつになります。だから、さぎょうする人には気をつけてほしいです。

はしがかんせいしたら、ぼくは新しいつう学ろにかわります。早く新しいはしをわたって学校へ行きたいです。そして、大人の人もはしができると、生かつがしやすくなります。たくさんの人がはしをとおって川しまに来たり、いろいろなばしょにお出かけしたりできるようになってほしいです。今から「新川しま大はし」のかんせいを、ぼくもかぞくもちいきの人もみんな、すごくたのしみにしています。

みんなでしぜんを大切にしよう

那加第一小学校　三年　**田中　鴻**

「山の木がたくさんばっさいされて、自力では森にもどれない。人間の力がひつようなんだ。」

一年前、家ぞくで森作りのイベントにさんかしました。元気などんぐりを土にうめ、一年間、育ててきました。毎日、水やりをして、すずしいかげで、すくすくと成長するのをわくわくしながら待っていました。

そして、五月の土曜日、育てたどんぐりのなえを山にかえしにいきました。その山は、いとしろにある小さな山です。ぼくが育てたどんぐりのなえを持って、山を登り始めました。

「ここはまだ、目的地じゃないよ。一番上まで登っていくよ。百二十四本のどんぐりを植えるよ。」

スタッフの人にそう言われ、と中何どか休けいをして、ちょう上を目指しました。山の半分くらいの所まで来た時、目の前には、きれいなけ色がありました。山があって、家や村があって、畑が何こもあるけ色です。とてもきれいだなと思いました。

ちょう上に着くと、下から見たときは木々で見えなかったのに、そこはあたり一面土だけの

場所でした。「これじゃあ、自力で森にもどるのはむ理だな。」と思いました。
「どんぐりのなえを植えるよ。」
のかけ声で植え始めました。
大きいなえを真ん中に一本植えて、小さいなえは大きいなえのまわりに八本植えて、合計九本植えます。ぼくが育てたどんぐりのなえは大きいなえなので、真ん中に植えました。シャベルで大きいあなを開けて、なえをあなに入れて、土をかぶせました。そのまわりに小さいどんぐりのなえを入れて、土をかぶせました。そして、水がよく入るように、まわりをぎゅっとおさえました。かんせいです。ぼくたちは、どんぐりのなえを三コーナー、全部で二十七本植えました。二十七本はけっこう多くて、時間がかかりました。
「元気に大きく育つといいね。」
「十年くらいでりっぱなどんぐりの木になっているかな。」
と家ぞくで話しました。
「雨がふるから、水はあげなくて大じょうぶ。」
スタッフの人が言いました。
「大へんだったな。」
山をまもるというのは、こんなに大へんなことだということを知りました。何年かして、ぼくがおとなになったとき、この山にどんぐりのなえを見に来たいです。元気に木に育っているといいなと思いました。
帰りに、前にくじょされたクマのかわをさわらせてもらいました。クマが食べ物をさがしに人の住む町にやってきて、人をおそうからくじょされるそうです。動物にもいのちがあるのになんだかかわいそうだと思いました。木がばっさいされ、クマが食べ物をさがしに人の住む町に来ないように、クマが食べるどんぐりの木がひつようなんだ。自ぜんをまもることと動物のいのちはかん係していると思いました。
社会のじゅぎょうでかかみがはら市にもたくさん山があると勉強しました。木がじゃまだからといって切るのではなく、手入れして、山をまもることが大切だと思います。
ぼくは、木を大切にします。山や木をまもる活動にこれからもさんかしたいと思います。

地域の「村国座」について

各務小学校　四年　**黒井　颯**

ぼくが住んでいる地域には、「村国座」という、明治時代に作られた、歌舞伎舞台があります。村国座は、国の重要有形みんぞく文化ざいに指定されています。
そんな歴史ある舞台でぼくは、昨年十月に「子ども歌舞伎」を経験しました。最初は、「歌舞伎って何だろう?」「どんなことをするのかな?ぼくに出来るのかな?」と楽しみと不安がまざったような気持ちになりました。夏休みから練習が始まり、夏休み明けで学校が始まってからも、帰ってから夜おそくまでたくさん練習をしました。その練習がとにかく大変でしたが、まず、苦戦したのがセリフを覚えることです。ふだん使わないような言葉を覚えることは、かんたんではありませんでした。また、歌舞伎と同時に、舞踊の踊りも覚えなくてはいけなかったので、二つのことが頭の中で交ざってしまって、苦労しました。なかなか動きを覚えられず、くやしい思いをすることもたくさんありました。でも、地域の人から応援してもらったり、教えてもらったりして、全員で成功させようという、みんなの気持ちが伝わり、最後までがんばろうと思いました。できるようになるまでは苦しかったですが、毎日家でも練習をくりかえしました。泣きながら練習をしたこともありました。でも、たくさんの練習のおかげで本番は成功し、いっしょにがんばった仲間とともに達成感を味わいました。終わってみたら苦しい時間もあったけれど、とても楽しい思い出になりました。
お父さんが子どものころに経験した歌舞伎を、ぼくも体験することができてほこりに思います。古くから伝わる国の重要有形みんぞく文化ざいで、歌舞伎ができたことは、本当にきちょうな体験で、ぼくの宝物です。ぼくの住む地域で大切にされてきた村国座を、これからも守り続けたいと思いました。そして、この先も、子ども歌舞伎が続いていってほしいと思いました。

じいちゃんの作る米

那加第三小学校　五年　**山田　楓羽人**

ぼくの家で食べている米は、じいちゃんの作った米です。つぶが大きくて、もちもちでツヤがあります。とてもおいしくて、毎日おかわりをしています。ぼくは、そんなじいちゃんの作る米が大好きです。米作りはとても大変だけど、じいちゃんはぼくたちのために毎年、一生けん命作ってくれます。
ぼくも小学校に入ったころから、毎年米作りの田んぼへ行き、手伝いをするようになりました。例えば、田植えの時期はどろだらけの田んぼに入ってなえを植えたり、しゅうかくの時期になると、米が実ったいねをかまでかったり、たくさんの仕事があります。はじめのころは、

手伝いもうまくできず、田んぼに行っては、遊んでいるだけでした。三年生のころからは少しずつ手伝いができるようになりました。かん単な荷物運びから始めて、今ではなえをわたしたり、わらをほしたりたくさんのことができるようになりました。いねかりの時、田んぼでつかれたら、かり取った米が入ったふくろの上で横になって休むのがふかふかしてとても大好きです。米が好きすぎて、ふくろから飛び出ていた米をその場でつまみぐいしてしまうこともあります。たくさん手伝いをしてきて、色々上手にできることがふえてきました。その中でもぼくがとく意なのは、なえが入っていたトレイをきれいにあらうことと、いねをスパッとかることです。トレイは近くの用水路でたわしを使ってあらいます。トレイはどろがたくさんついていて、力をこめてきちんとあらわないとどろがとれません。用水路の水の流れが速いと流されそうになることもあり、とても大変だけど、きれいになると気持ちがいいです。家族の中で一番速くあらえます。いねかりは、いねを二、三束持って根元にかまをしっかりあてて切ります。コツは、いねを束ねてつかんだ手をギュッとにぎってはなさないようにして、いきおいよく手前に引いてかります。速く思い通りにかれると、とてもうれしいです。毎年かれる量がふえてきたので去年は百束くらい、かることが出来ました。米作りを手伝うことで、じいちゃんもうれしいし、自分も役にたてたな！と、すっきりした気持ちになります。

ぼくは、じいちゃんの作るおいしい米をもっと食べたいし、他の人にも食べてほしいと思っています。そのためには、今の米の作り方を覚えて、ずっと作り続けなければなりません。しょう来は作り方を覚えておいしい米を引きついでいきたいと思っています。おいしい米を食べてみんなも笑顔になって、ぼくもおなかいっぱいになって楽しい未来を作っていきたいです。

自転車に乗るぼくとあなたにできること

川島小学校　六年　**渡邉　創太**

どうして自転車に新しいルールができたのか。どうしてルールがきびしくなったのか。ぼくもたくさん自転車に乗ります。でも、車にくらべて自転車がそんなにあぶないと思ったことがありません。なのでルールが新しくでき、きびしくなったことが不思議でした。年間七万件。これが何の数字か分かりますか？。これは年間の自転車関連事故の数です。ぼくは調べてみてとてもおどろきました。そして、自転車のルールについて詳しくしりたいとも思いました。

二〇二六年四月一日より改正道路交通法が施行され、自転車のい反行いに対する青切符が導入されました。十六さい以上を対象に、信号無視やながらスマホ運転など百十三種類のい反に対して三千円から一万二千円程度の反則金が科されます。また、車にも新たにルールが追加されました。それは自動車側からの追いこしルール強化です。自転車の右側を通過する際、一メートルから一、五メートルの安全な間隔を確保できない場合は、減速義務が発生する、というものです。ここでぼくは新たなぎ問が一つ生まれました。ぼくがすむ川島でこのルールは守られているのか、守ることが出きるのか、と。川島は自転車に乗る人がとても多くいます。また、車も多く通っています。さらにぼくは、川島の道路には自転車専用の道が少ないことに気がつきました。歩道を走る人もいれば、車道を走る人もいて、場所によってはとてもあぶないと思いました。特に朝や夕方は通学する高校生や仕事に向かう車の人が多くて自転車と車が近いきょりですれちがっています。ぼくも、自転車に乗っていて「少しこわいな」と感じたことがあります。また、車を運転する人も気をつけないといけないと思います。急いでいる時でも、自転車の近くを速いスピードで追いこしたり、無理に曲がったりすると事故につながります。新しいルールで、自転車の横を通る時は安全なきょりを空ける決まりができたのは、おたがいを守るためなのだと分かりました。そして、自転車の人も「少しくらいなら大丈夫」と思わず、信号や一時停止をしっかり守ることが大切です。スマホを見ながら運転すると、周りを見ることができず、とてもきけんです。自分だけではなく歩いている人にも迷わくをかけてしまいます。

ぼくは今回調べたことで、自転車は便利な乗り物だけど、使い方をまちがえるときけんになることを学びました。だからこれからは、自分から交通ルールを守り、周りの人の安全も考えて行動したいです。また、家族や友達にも、自転車の安全について伝えていきたいと思いました。

私の好きな文化財

鵜沼中学校　一年　**後藤　愛結**

「すごいなー。」

初めて見た時、そう、つい口に出してしまった。その場所は、私たちの住む、各務原市内の文化財、村国座。

初めて知ったのは、小学三年生の時だ。授業

で、村国座を知ろうという活動があった。実際に建物を見たり、管理をしている方から、話を聞いたりした。

特に印象に残っているのは、皿回し式と呼ばれる、舞台の下で舞台に繋がっている柱を押すと、舞台が回る仕組みになっている装置だ。それは子供歌舞伎などで、背景を変えたりするために使われる。私も回す体験をした。回す時、数人がかりでやっても、私は重く感じて、見えないところで作業員さんが支えているんだと感じた。普段は体験できないことから学ぶことができた。ありがたいと思った。

その頃村国座は、テレビでも紹介されたりして有名になっていた。そんな文化財の建物が身近にあることを知って、ちょっと嬉しくなったと同時に、興味がわいてきた。

その授業に続き、子供歌舞伎、舞踊について学んだ。その時、先生が当時の子供歌舞伎の動画を見せてくれた。私と仲のいい、六年生のお姉さんがやっていて、改めて親近感がわいた。かっこいいな、自分もやってみたい、と思った。でも自分でもできるのかな、と不安な気持ちもあった。それでもやってみたいと思った理由は、主に三つある。

一つ目は、歌舞伎をやったことがあるいとこが、とても面白いと私に話をしてくれたからだ。二つ目は、昔から和服が好きだったからだ。子供歌舞伎をすれば、いつもの服とは違った新鮮さが感じられる、普段は着られていない昔の服が着られる。三つ目は、歌舞伎や舞踊をやっている時の役者の行動がやっぱりかっこいいと思えたからだ。私もあんな風に演じたいと思った。

「私もいつかやりたいな。」

その願いが叶ったのは、小学五年生の時だ。私は舞踊をやることになった。練習がはじまったのは、本番の三、四ヶ月前だ。はじめは緊張して、そわそわしてしまっていた。けれど、練習を重ねていくうちに、徐々に堂々と演じることができてきた。家でも、師匠に教えてもらったことを繰り返しやったり、師匠の前で練習したときに撮ってもらった動画を後から見直したりしながら、工夫して練習した。

そして月日が経ち、本番当日。緊張と不安があった。本番前も、ペアの人と最後の練習をして、本番に挑んだ。演じている時にも、不安もあったけれど、それ以上に自分が楽しんでできた。少しふりを間違えてしまったけれど、上手に演じることができた。

終わった後、地域の方々が、

「舞踊をやってくれてありがとう。」

と言ってくださった。地域の方々の心の温かさに嬉しくなった。舞台を準備などしてくれて、陰で支えて、はげましてくれていることがありがたかった。また、ペアの人や舞台を準備をしてくださる地域の方々。やり方を教えてくださった師匠やいつも支えてくれた保護者の方々。そういった子供歌舞伎、舞踊に関わっている全員で協力してつくりあげたものだと私は思った。

私はこの経験を通して歌舞伎っていいな、歌舞伎ではない、ほかの文化財もすてきなんだろうなと思えた。その時、この村国座の文化財を継いでいく一員になれたのかもしれない、と思った。また、みんなで協力して、つくりあげるということを学べた。

今後、子供歌舞伎に出ることはないだろう。次は、見に行く側にまわり、伝えたい。各務小学校区には船山古墳、鵜一小学校区には中山道鵜沼宿、八木山小学校区には伊木山古墳群など、鵜沼中学校区にもたくさんの文化財がある。見たり、友達から聞いたりして、もっといろんな文化財を知りたい。やっぱり、各務原市の文化財が好きだ。

マイ　アップデート

那加中学校　二年　**鈴木　実優**

私は自分で言うのもなんだが、本オタクだと思う。本とあれば、小説や物語だけではなく、漫画やライトノベルも読む雑食だ。小学生の頃は暇さえあれば、図書館に通っていた。返却のたびに新たに本を借りて、エンドレス図書館だった。しかし、中学生になった今、ほとんど図書館に行けなくなった。塾や部活、習い事で圧倒的に自分の自由になる時間が減ったからだ。だから今は学校の図書室に通っている。クラスは違えど、本好きな友達と図書室で待ち合わせをし、おすすめの本を紹介してもらったり、面白そうな本を読んだりして、過ごしている。

本が好きな理由は色々ある。その中の一つは悪く言えば現実逃避だ。本を読んでいる間は、現実の嫌なことや、考えなければならないこと、やらなければいけないことから、目を背けられる。現実の嫌なことから、少し離れることによって、時間があき、俯瞰的に見ることが出来ている、のだと思う。もう一つは単純に、図書室の雰囲気と匂いが好きなのだ。図書室のしんとした静かな空間が、やけに落ちついて、居心地が良い。そして図書室独特の匂い、それは本のインク、紙、接着剤の匂いらしい。しかし、家の本の匂いを嗅いでも、図書室の匂いとは違う。空間と匂い、両方が合わさって、初めて図書室の匂いなのだ。

本よりも楽しいことがないわけではない。ス

ポーツをすることやユーチューブを見ることも好きだし、友達とラインするのも楽しい。しかし本でしか味わえないこともある。活字を見ることによって落ち着くのだ。そして自分では考えもしないことや、新たな発見、知識を得ることができる。その本の世界を想像することが楽しく、気持ち良いのだ。

私が最近読んだ本で、改めて考えさせられたことがある。普通とは何だろう、ということだ。「普通」の意味を辞書で調べてみた。〝普通とは、どこにでもあって珍しくないこと、当たり前。〟みんなと同じでいたい、目立ちたくない、注目されたくない、変な奴だと思われたくない、私も少なからず思っている。しかし、この本の主人公は他人に流されない、自分のやりたいことは誰に何と言われても絶対にやる、という意思の強い人で、私には思いもしない考え方をするのだ。私は「物事を進めるのが遅い」と思っているのだが、その主人公は「丁寧で良い」と考える。はっとした。当たり前だが、一人一人考え方は違うのだ。世の中には色々な人がいて、色々な考え方がある。ならば、自分が自分らしくあれば、他人にどう思われようが関係ないのだ。他人からみた私は、私ではなく、その人からみた私なのだから。そう考えるようになったら、今までぎゅうぎゅうに凝り固められた「普通」がどうでも良くなった。今までもやがかっていた視界が、急に晴れたようだった。

私は自分を創造することにした。今までは、他人の目を気にしすぎてしまう、行動する前に頭で色々と考えてしまう自分だった。そんな受動的な自分から、考えるよりもまず行動してみる、とりあえずやってみる、ダメでもいいからやってみる能動的な自分を創造する。こんな考え方をするきっかけは間違いなく、本だ。ワクワクする本、泣きながら読む本、緊張しながら読む本、自分の価値観すら変えてしまう本など、これからも本が私に影響を与えてくれることだろう。そして私は、それらをどんどん取り込んで、私自身をアップデートしていく。私の創造は、続いていくのだ。